放課後メイド隊

河里一仲
illustration ◎神保玉蘭

美少女文庫
FRANCE SHOIN

I お迎えします！～先生メイドのヒミツ授業

1 六畳一間から

「ふああ……やっと、三学期も終わりかぁ」

終業式を終え、学生服姿の晴哉はほとんど中身の入っていない学生カバンをブラブラさせながら、一人暮らしをしているアパートへと戻ってきた。

築三十年の年季の入った外観、そしてトイレと小さな風呂つきとはいえ六畳の和室が一間という間取り。この古アパートの一〇三号室が、少年のささやかな城である。

晴哉は部屋に戻ると、下駄箱の上に置いてある両親の写真に、いつものように手を合わせた。

「ただいま、父さん、母さん。終業式が終わったよ。あれから、もう二年……僕も、来月には三年生になるんだ」

今さらだが、多少なりとも成長した自分の姿を両親に見せたかった、という思いが湧いてくる。

しかし、それは叶わない夢だ。というのも、父の高見沢修一（たかみざわしゅういち）と母の美枝（みえ）は、少年の進学が決まった直後のほぼ二年前の春に、バスツアー旅行中の事故に遭って二人揃って命を落としていたのである。

両親を一度に失っていきなり天涯孤独となってしまった晴哉は、しばらくショックから抜けだせなかった。それでも落ち着いてきてから、両親と暮らしていた一軒家を売り、学校近くの古アパートに引っ越して自活するようになったのだ。

家を売った金と事故の賠償金などのおかげで、当面の生活費に不安はない。だが、日々の学校生活と慣れない一人暮らしに悪戦苦闘しているうちに、あっという間に二年が過ぎてしまった気がする。

さすがに、これだけ時間が経つと気持ちの整理もついてくるが、まだ両親の写真を見ると悲しみがこみあげてくるのを抑えられない。ただ、飾ってあるスナップ写真の修一と美枝は本当に仲むつまじそうで、自分の両親ながらもうらやましくなるほどだ。

「……さて、昼飯でも作ろうかな。そのあとで、ちょっと部屋の掃除をしておこうっと。さすがに、そろそろヤバイし」

つい感慨にふけっていた少年は、自分に言い聞かせるように言って頬を軽く叩いた。

男の一人暮らしなので、仕方がないと言えばその通りかもしれないが、今や室内は自分でもあきれるくらいのカオス空間と化していた。足の踏み場と言えば、布団を敷くスペースがあるだけで、あとはいろいろなモノが文字通り部屋一面に散乱している状態である。

正直なところ、晴哉は家事の類があまり得意ではなかった。昔は母が部屋の掃除までしてくれていたため、自室をマメに掃除するという習慣が身についていないのだ。

これから春休みで、帰宅部の少年には時間が充分にある。少しは片づけておかないと、せっかくの休みを汚い部屋で過ごすことになりかねない。

少年は、畳の上の障害物を巧みに避けながらキッチンに向かった。そして、バーゲンで買い置きしておいたカップラーメンを取りだし、ヤカンを火にかける。

「あ〜あ。メイドさんでもいたら、部屋の掃除とか食事の用意とかしてもらえるのに。いや、メイドじゃなくても、そういうことをやってくれるカノジョでもいたらなぁ」

家事をするたびに、そんな愚痴がつい口をついてしまう。

だが、両親が死んでからの二年間は、自分の面倒が精いっぱいで恋人を作るどころではなかった。それに、三年生になったら進路のことを考えなくてはならないので、とてもカノジョを作っている余裕はないだろう。

「まぁ、当分は今の生活のまんまだろうな。学校を卒業したら、なにか変えたいけど

……僕なんかに、なにができるんだろう？　結局、まだ進学か就職かも決められずにいるし……」

そんな物思いにふけっていたとき、不意にドアチャイムが鳴った。

「はーい。どちら様？」

晴哉が声をかけると、

「高見沢晴哉さまでいらっしゃいますか？　お迎えにあがりました」

という、聞き覚えのない若い女性の声が聞こえてくる。

「はあ？　お迎えって……なんかの間違いじゃないの？」

少年はワケがわからず首をかしげながらも、ひとまず玄関に向かう。そしてドアを開けたとき、晴哉はそこに立っていた人物の姿に目を丸くしてしまった。

彼女は、おそらく少年と同い年か少し上くらいだろう。ロングヘアに、にこやかな笑みを浮かべた顔がなんとも魅力的な美少女である。

ただ、それよりもビックリしたのは、少女の服装だった。真っ白な襟と袖口以外は全体が濃紺のフルレングスのワンピースに、フリルのあしらわれた純白のエプロンと首もとのワインレッドのリボン。そして、頭にもフリルつきのカチューシャという彼女の格好は、誰がどう見てもメイド以外の何者でもない。

そんな、どこかのコスプレ会場かメイド喫茶から抜けだしてきたような服装の美少

女が玄関前に立っていたのだから、驚くなというほうが無理だろう。
晴哉の顔を見ると、少女はうやうやしく頭をさげた。
「高見沢晴哉さま、はじめまして。わたくし、高見沢家のメイドの倖月鈴乃と申します。あなた様をお迎えにあがりました。さっそくですが、引っ越しの準備をさせていただきますね」
と言って、にこやかな笑みを見せた鈴乃に対し、少年は突然のことに「はぁ?」と間抜けな声をあげて立ちつくすしかなかった。

2 数十人のメイドたち

「……」
鈴乃にうながされてリムジンを降りた晴哉は、言葉を失って呆然とするしかなかった。
今、少年の前にひろがっているのは、とてもこの世のものとは思えない光景だったのである。
噴水つきのヨーロッパ風庭園の美しさと広さもさることながら、壁が白一色に統一された大きな洋風建築の屋敷は、家と言うよりも宮殿のようだ。この屋敷と比べたら、

高級住宅地の豪邸すら貧相なあばら屋に思えるだろう。もちろん、ついさっきまでいた六畳一間のアパートと比べれば、月とスッポンどころではない大きな差がある。

あれから、「倖月鈴乃」と名乗った少女は唖然としている晴哉を尻目に、悲惨な状況だった室内の片づけをはじめた。その手際は魔法のように見事で、一時間とかからずに晴哉の部屋は見違えるように綺麗になってしまった。

少年が掃除をしていたら、おそらく一日かかっても終わらなかったと思うし、あとから来た引っ越し屋も驚いていたほどなので、鈴乃はかなり優秀なメイドなのだろう。

そのあとさらに、少年はワケもわからないまま美少女メイドにうながされ、大型リムジンに乗った。そして、一時間ほどかけて連れてこられたのが、この常識はずれの大豪邸だったのである。

「今日から、こちらがあなたのお家になります」

美少女メイドの声で、晴哉はようやく我にかえった。

「あの〜、倖月さん?」

大きな玄関を前にした少年は戸惑いながら、隣りで微笑む鈴乃に声をかけた。

「わたくしのことは鈴乃とお呼びください、ご主人様」

「じゃあ、鈴乃……あのさ、その『ご主人様』って……それに、ここが僕の家になるって、いったい? 話が、さっぱり見えないんだけど?」

「ですから、車内でもお話ししたように、亡くなった先代・高見沢光司郎様のご遺言で、あなたを新しい高見沢家の後継者として迎えることになったのです」
「おじいちゃん……だよね？　テレビで何度か見たことがあるけど、あの人が僕のおじいちゃんだったなんて、まだ信じられないや」
　高見沢光司郎は、裸一貫から一代で世界的大企業「ＴＭＺグループ」を創りあげた辣腕経営者として有名だった。しかし、半年ほど前に病死したというテレビ報道を目にした記憶がある。同じ「高見沢」姓なので少し気にしていたのだが、まさか本当の祖父だったとは。
　ただ、父はちょっと常識知らずで抜けたところがあったものの、どこにでもいそうな普通のサラリーマンだった。また、母も住宅ローンに頭を悩ましながら、それでいて笑顔を絶やさない優しい主婦だった。
　もちろん、両親とも親戚付き合いがまるでないことに、晴哉も疑問がなかったわけではない。たとえ親族間の仲が悪かったにしても、葬儀にも血縁者が誰一人来ないというのは、今考えてもいささか異常だったと思う。
（だいたい、父さんがＴＭＺグループ総帥の息子なら、どうして付き合いがまったくなかったんだろう？）
　という疑問が、あらためて晴哉の脳裏をよぎる。

しかし、両親も祖父もこの世にいない今となっては、事情を確認する術はない。
「とにかく、なかへどうぞ。まずはお茶でも召しあがって、おくつろぎください」
鈴乃にうながされ、少年は高さが三メートル以上もある大きなドアの前に立つ。すると、自動ドアでもないだろうに、重たそうな扉が勝手に開きはじめた。
目を丸くしていた晴哉は、ドアの向こうを見てますます目を大きく見開いた。
そこは、舞踏会ができそうなホールになっており、奥には映画でしか目にしたことのない豪華な踊り場つきの階段がある。
そして、ホールから階段までの両側には、メイド服を着た女性たちがズラリと整列していた。その数は、おそらく二十人以上。やや年長とおぼしき者もいるものの、大半が晴哉や鈴乃とそう変わらなさそうな年齢の少女たちだ。
また、ほとんどが鈴乃と同様にフルレングスのスカートのメイド服姿だが、一部にはコスプレ喫茶にいそうなミニスカートのメイド服を着ている者もいる。
「お帰りなさいませ、ご主人様」
女性たちは声を揃えて言うと、一糸乱れずに深々と頭をさげた。
テレビで見たメイド喫茶のような挨拶を受けて、晴哉は言葉がなかった。そもそも、初めて来た家で「お帰りなさいませ」などと言われても違和感しかない。
さらに、傍らにいた鈴乃も、あらためてうやうやしく頭をさげた。